

生徒の季節感とそのとらえ方

——「枕草子・春は曙の段」学習指導を通して——

池 田 恭 仁 子

一、はじめに

高等学校の古典学習指導のあり方としては、根本的には、自分達

が受け継いできた日本人の文化を理解すること——風土に結びついて育てられた独自のものの見方・考え方・生き方を知ること——が

考えられる。私は、高等学校一年の生徒に「枕草子」を指導するにあたって、生徒に何を学びとらせるかを確実にしておこうとしたのであるが、これだけではできなということが言えるかどうか、指導のあとを顧みて一つの報告を試みたいと思う。

取扱ったのは、昭和三十三年十二月から昭和三十四年一月にかけて、「第十單元 日本の風土」(日本書院)の中においてである。

「枕草子」は、第一段、春は曙、第二段、すさまじきもの、第三十五段、木の花は、第六十六段、野分のまたの曰、第二百六十一段、雪いと高う、が摘録されているが、私が特に、春の曙の段に限って考察しようとするのは、一つにこれが最初の段であること、次に文章の主題・構想・叙述が非常に簡潔で明快であること、第三に生徒に共感をよぶことが容易であることなどによるものである。

この学習指導の眼目としては、原文のよさをとらえることを第一とし、そのためにどのような点をとらえるかを考えた。そして、私は次の二点をとり上げたのである。①作者清少納言の持つ季節感とそれに伴って現われる個性的なものの思い方、②文章の簡潔性・論理性の二点である。これに添って指導の方法は、できるだけ原文を生徒自身が持っている感覚やことばへ近づけていく方法を考えることにした。

二、生徒の季節感・思い方の分析

(1) 生徒の文章

「第一段」を読み終えた直後に冬休みに入るのので、私は生徒にも同じ気持ちでこのような文章を書いてみるように指示した。

「みなさんは、それぞれの季節について一日のうちいつが一番

好きだと思いませんか。その季節のよさが最も味わえる時を考えてみて下さい。清少納言と同じだというのがもあるかも知れない。また新しい見方をする人もいるでしょう。「春は宵がいい」という人もいるかも知れませんが、秋はやはり夕ぐれかしら。冬は夜の好きな人もいますと思えますよ。なぜいふと思うのか、どういふところが好きなのか、書いてごらん下さい。現代の清少納言がぞくぞく現われるとうれいすね。原稿用紙一枚以上です。」

生徒は、迷惑をうな、くすぐったそう、それでも興味を覚えたらしい顔をしていた。

三学期の初めに、クラスの生徒中、よく整ったもの、表現のよいもの、個性的なもの、異色のもの四編を選んでプリントにして配った。中でも、興田という女生徒のものが最もよく整っていると考えられたので、これを授業の話し合いに用いたが、こゝでも、例としてとりあげ、生徒の持つ季節感・思い方を分析しさらに「枕草子」と比較して考察を進めてみたいと思う。

初めに生徒の文章を記しておくことにする。(生徒の名は以下Oとする)

「季節に思うこと」

興田 和子

春は夜。

月夜に外へ出て空をながめると、薄緑の空がぼんやりとかすんで見える。その薄いたれぎぬを通してタマゴ色の月がぼつかりと一つ。その月の光が、ほの白く地上を照らすと、しんとして声のないこの世界から、一足跳びに昔懐しい奈良・平安朝の世界に帰ったような気がする。人里離れた山奥の竹やぶに囲まれた家で、静かに琴の音を聞くような、そんな懐しい空である。

夏は朝。

コバルト色の空の下で、色とりどりの朝顔の花を見ながら冷たい朝の空気を吸って今日一日の事を考えるのは、何とも言えない程、楽しいものである。遠くでやっているラジオ体操の音楽に自然と手足を動かしたくなる。一年中で朝の一番気持ちの良い時である。

秋は夕方。

稲穂が波のように揺れている田舎道を歩いていると、金木犀の酔いそやかな香りがたぎよってくる。その香りのしてくる方を見上げると、白壁の中にある家の瓦屋根に夕陽が照りはえている。どこまでも続く黄金の波と颯のうろこのような瓦屋根との間に白壁と積木の柱とが小じんまりとまとまっていた暖かな落着いた景色である。

冬は風、

もうそろそろ正午近くになろうとする頃、冬の日射は障子ごしにやわらかく射しこむ。そんな時、針仕事をしている母の横に目を細めて寝そべっている猫の姿などを見ていると、安心感にも似たほのぼのとしたものを感ぜさせられる事がしばしばである。又、雪やあられの降っている時、皆一緒にコタツに入っている。老人から昔の話の聞いたり、愉快に雑談するのも楽しいものである。

(1) 一般的傾向

このクラスの生徒数は五十一名、うち男十六名、女三十五名である。プリントを中心にしての話し合いでは、Oさんの文章

には多くの共感がよんだようであった。特に、夏、秋はそうであった。また冬では、猫という動物に親しみを感じる生徒もあって、猫とか蟹とかからすなどは次第に季節感をよぶものとしては影がうすくなるような感じさえする。春では「昔懐しい奈良・平安朝の世界に帰ったような気がする。」という文において「帰る」の表現がびつたりしないという発言が男生徒よりあって、古典に対する感覚について考えさせられた。

(2) 時間的把握

Oさんの文章では、春は夜、夏は朝、秋は夕方、冬は風としている。クラス中、夏の夕朝、秋の夕暮が圧倒的であったが、それを代表しているのがこれである。このとらえ方を、季節に即して言えは、夏は近代的感觉、秋は古典的感觉ともいえるものが見られるのではないかと思う。夏・秋という季節そのものが、それぞれ近代的・古典的感觉を人間に起させるのであろうか。なかならず、夏においては朝、秋においては夕暮がその季節感を象徴するものとして共通に受けとられるようである。

その他の生徒のものでめだつものとしては、春の「風」、夏の「夜」、冬の「朝」と「夜」があった。それも、夏の「夜」と冬の「朝」は「枕草子」によって気づきあらためてそのよさを思うという点もあつたであろうと考えられる。従って、時間的把握の一般的傾向としては、春——風、夏——朝、秋——夕暮、冬——夜ということが言えると思う。

Oさんの場合は、春の「夜」、冬の「風」とらえ方において独自のものがあふれており、春には浪漫性、冬には現実性を

感ぜしめる。

(回)主題・構想(素材から)・表現についての「枕草子」との比較

(1)主題

四季において時間的にとらえ、そこにいかなるものをとらえるかということになると、いさゝか複雑になってくる。クラスの大抵は、あれもこれもと雑多な景物を集めてまとまらず、時間的にもずれたものが雑多物となっている場合が多い。何に季節感をもよおすかということも、平安時代と現代とでは相当の違いが見えるはずである。「枕草子」では細いもの、こまかなものしかとらえられていないという批評も、説んだことがあるが、現代では感じ方もことばもひどく雑多になっている感じがする。(この指導のあと、試みに色でいうなら何が合うかと尋ねたところ、生徒の大部分の答は、春——ピンク(水色)、夏——白、緑、青、秋——褐色、冬——グレー、白、黒であった。これによると、「花」「木」「空」「服装」などがその感覚の形成の基盤となっているわけである。総括的にいえば、天地というとりえ方になるが、季節による「空」の変化を感じるの古今変わらず、日本風土の特質とも考えられておもしろい。)なお、例外であるが、事象そのものをとりあげ、「春は芽。」「夏は海。」「秋は山。」「冬は枯木。」といったものも少数あった。このことは、その生徒が時間的に象徴される季節感にまで到達することができないで、季節感をもよおす事象をかゝげるところでとどまっているということができる。そこで、生徒の実態を三段階に分類すると、①「枕草子」的・主題統一のあるもの(〇さんの場合)、②混合、(①と③の)したものの、③

即物的主題をもつもの、となる。

さて、〇さんの場合は、たとえれば、一つの濃い色を紙に落とし全体に広げつゝ、調和した色彩に仕上げるような、主題の統一が見られるわけである。〇さんのこの文章を読んで、もう一度「枕草子」の原文を読むと、その主題の緊密性・構想の簡潔性のよさが一層よくわかったのである。しかし、そうではあっても、原文は、現代文と比較すれば単調とも言えなくもないが、それを救っているのは何であらうか。表現についてはさておくとして、私はそれは清少納言のもつ現実性ではないかと考へる。作者の感覚が現実の事象と結びついて集約されての表現であるから、非常にいきいきとしたものとなっているわけである。〇さんの文章も、「春」は懐古性をもつが、「夏」「秋」「冬」はともかく現実性が終始強いように見てとれ、いきいきとしたおもしろみを表わしているようである。

(2)構想(素材から)

「枕草子」原文で気づいた点の一つあげると、独断かもしれないが、天地の調和というところである。

春(山ぎは、雲)地と天

夏(月、はたる、雨)天と地

秋(夕日、からす、雁、風、虫)天地

冬(雪、霜、炭火)地

そして、〇さんの場合もこのような見方ができる。やゝくわしくとりあげてみよう。

春は夜。(月夜、薄緑の空、タマゴ色の月、懐しい空)

夏は朝。(コバルト色の空、朝顔の花、一日のことを考へる、ラジオ体操の音楽)

秋は夕方。(稲穂、金木犀、白壁の家、瓦屋根、夕陽)

冬は風。(日射し、障子、針仕事をしている母、猫、安心感、雪、あられ、コタツ、老人からきく昔話、雑談)

こうして並べてみると、清少納言は殆んど景物しかとらえていない。冬にしても同じであつて、 \times 炭もて渡るもいとつきづきし \times など主観的にとらえているようでありながら、客観的にうち出されている。これが「をかし」の精神なのであつた。それに対して生徒のものは、景物と同時に主観をのべ、主観な語を用い、さらに生活的なものを折り込んでゐる。主観的といえ、清少納言は「秋」において「あはれ」を見いだしている。こゝではじめて「をかし」の真髓にも近づきうるルートが開けるはずなのであるが、まだ分析不足であつたため、実際の授業は「をかし」を観念的な説明に終らせてしまつたのは残念である。次の機会には必ず生かしてみたいと思つている。

次に、生徒の季節感としては、春に懐しさを見出し、夏には気持のよい新鮮さを求め、秋では、こじんまりとまとまつた暖かな落ち着いた景色のよさを発見し、冬においては、ほのぼのとしたよさ・柔しさを認めようとしてゐる。これを「枕草子」と比較してみると、 \times 春は曙 \times では、春に艶なるものを見、夏には、気持のよい新鮮さを求め、秋ではあざやかな中にも落ちついた趣深い景色のよさを認め、冬においては、寒さ下にひきしまる感じの中から炭火を媒介に暖かさ・ふさわしさを発見している。この一致は、分析中最もおもしろいものであると思ふ。

(3) 表現

まず言えることは、生徒の表現にはいたずらにといつてよいくらい修飾句が多い。例えば、春の \times 薄いたれぎぬを通してタマゴ色の月がぼっかりと一つ。その月の光がほの白く地上を照らすと、しんとして声のないこの世界から、一足跳びに昔懐し

い奈良・平安朝の世界に帰つたような気がする。人里離れた山奥の竹やぶに囲まれた家で、静かに琴の音をきくようなそんな懐しい空である。 \times などである。現代文は、とかく共通の季節感、語感というものが希薄になつて、多くの説明が必要となつてくるのかもしれない。そして、それに応ずるだけの経験とことばが豊富になつてゐるとも考えられる。

次に、省略法についてみると、Oさんの場合は少ないのであるが、他のものによく見つけられた特徴的なものである。これは原文にひきつづられていることは確かなのであるが、一方、びつたりとする述語を用いるのがむずかしく、単調になりがちなのを嫌つて、 \times いっそのこと \times と体言止にしたものもいるのではないかと察せられる。(例、春——のどかな気分、のどかなふんいき。秋——なんとなくもの悲しい秋の夕ぐれ、ふるさとを思い出すよくな夕ぐれ。冬——心臓の鼓動がトントんと聞えてくる夜。)たゞ、試みに論じれば、以下の考が成立するのではないだろうか。もし叙述に、感性的叙述というものを認めるとすれば、「枕草子」はこれに当ると思う。感性的叙述に対するものが何であるかを明示することはできないが、「徒然草」にはまた、思案的叙述というものが見られるはずであらう。そこで、「枕草子」の直観的な鋭どきはよく解説されるところであるが、この感性的叙述の表現から、生徒が省略法にそのリズムを身近に見出し得たとするも不当ではなからう。

三、結びに

以上、生徒の実態を通して、学習指導の反省を行い、教材研究の深まりをいさゝかでもなしたことを取組として、今後の資料としたいと願つている。先生方、皆様方の御指導をお願いいたして拙稿を終えたい。(一九五四・九・二九)